

西大寺
十一面観音像
重要文化財

1674年に再建された四王堂に収められているこの像は、仏教の慈悲の女神として知られている菩薩観音の像である。観音は人々を病気から守り、食べ物や富を確保する手助けをされると考えられている。11の顔は様々な表情をしているが、一番大きな顔は慈悲と静けさを醸し出している。11個の顔の意味には諸説あるが、悟りに至るまでの道筋の10の段階を表しており、11番目の一番上についている顔が悟りを開いた状態を示している、という解釈もそのひとつである。

この観音像は、奈良県の長谷寺の観音像と同じ様式でつくられている。平安後期の1145年に鳥羽天皇の御願によってつくられたもので、1289年に亀山天皇（1249～1305年）の命により京都からここに移された。